繪本甲越軍記 初編 十

遠
2258
10

へ遠 13
2258
10
特
済

小前田先生編 金井 小二郎一代記 三十 大尾	新説 伊藤専三編 暁天 星五郎一代記 五十 大尾	怪 三遊亭圓朝演述 談 牡丹燈籠 三十	塩 同 原 多助一代記 四十 大尾	業 同 平 文治一代記 全	
大 岡 小西屋政談 十二	近世 小説 河内山實録 五十 大尾	一 御得意様方益御きげん能恐悦至極ニ奉存候 陳は私店年来かし本渡世仕候処御ひいきを以て日にまし繁昌仕り有難仕合に奉存候 扨開化の御世に相成西洋各國の書物 翻譯書 繪入讀本 滑稽本 都而貸本類品々沢山ニ所持仕候間別ねだん下直ニ相働き 急ぎ御間高覧の程相願上候 御注文下され度 猶又御贔屓之程偏ニ奉希上候 以上		月 日	誠光堂謹白
繪 本 星月夜顕晦録 三十 大尾	大郷穆編 燕山外史 二冊				

和漢書物 小説貸本所

東京京橋區弥左エ門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋 清吉

繪本甲越軍記巻之十

目録

小田井(とさゐ)落城(らくじやう)之事 并 城将(じやうしやう)小田井家朝(とさゐいへとも)合戦(かつせん)之事
山本勘助(やまもとかんすけ)智計(ちけい)抜(をとしいる)小田井城(とさゐのしやう)図
小田井(とさゐ)又六郎(またろくらう)戦亡(うちじに)図
高坂弾正(かうさかだんじやう)頭褒賞(かしらほうしやう)事 并 春日源五郎(かすかげんごらう)由緒(ゆいしよ)之事
春日(かすか)源五郎守義(げんごらうもりよし)去家郷(いへをさる)図
武田晴信(たけだはるのぶ)謀殺(ぼうさつ)諏訪頼茂(すはよりしげ)事 并 諏訪家(すはけ)断絶(だんぜつ)之事
三傍為武田家来於諏訪滅跡和議図

武田家士撃諏訪頼茂之潜兵圖

晴信令荻原孫太郎刺諏訪頼茂圖

長坂左衛門尉因殺諏訪頼高圖

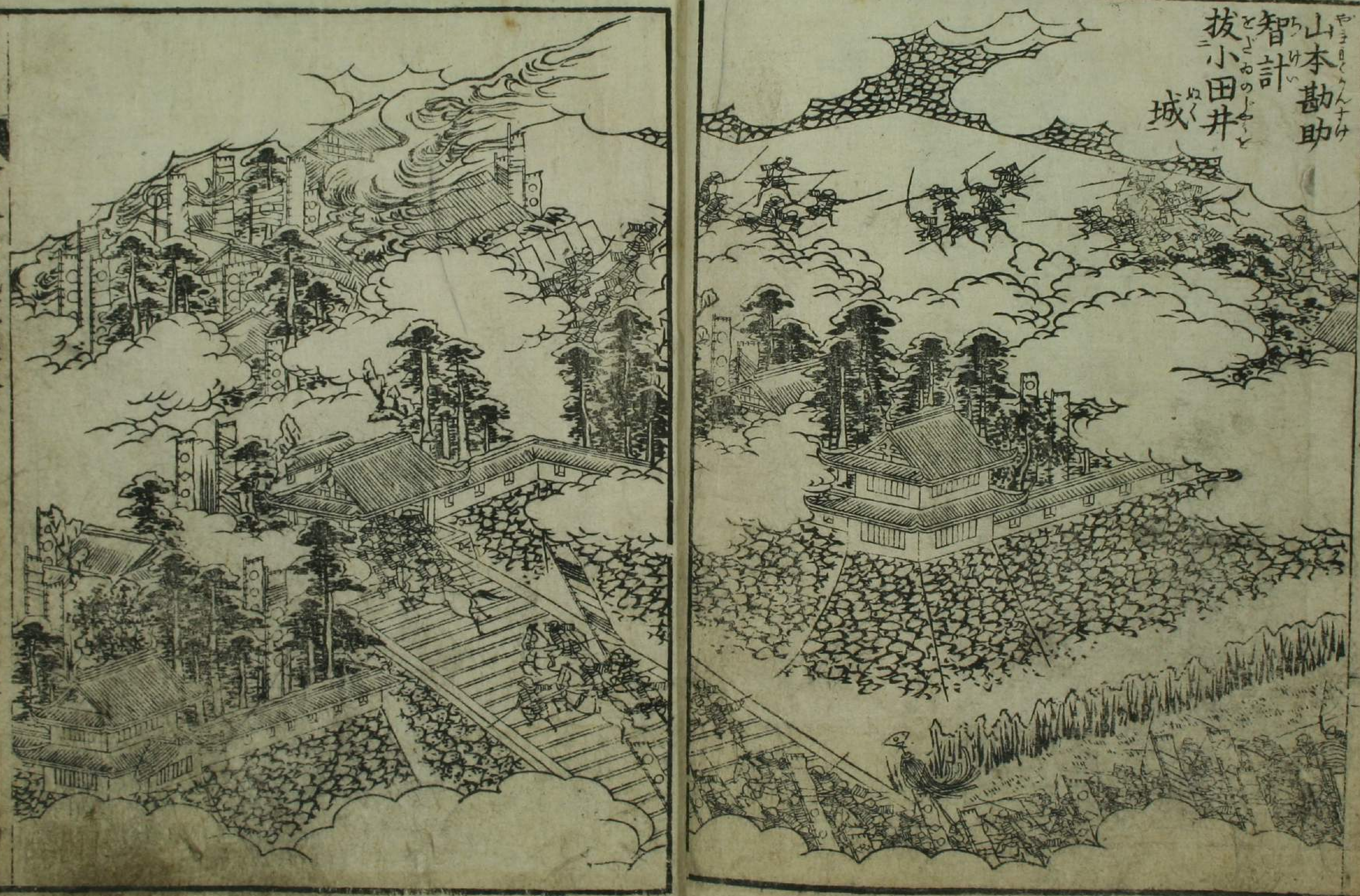
甲州勢入諏訪城濫妨圖

225

繪本甲越軍記巻之十

小田井落城之事 并 城将小田井安家期合戦之事

蟷螂蝉を窺へば野鳥蟷螂を窺ふと云へり小田井又兵衛既に武田の大
軍中城を窺ひ殺戮ふく[illegible]して却て勇士数
多を討ぬ城中に引入て武田勢を[illegible]続いて[illegible]せんと操ぬと
いへども金鳥枝葉を求めて後両軍既に相引よりて引退き晴信本陣の
火を放ちける[illegible]勘助二千余騎の兵を帥ひ馬を[illegible]
強弓[illegible]勘助は兼て小諸の街道の兵をうけ陣しが陣と相去
武田軍[illegible]不勝の[illegible]夜討の大事[illegible]起り[illegible]
城中の兵其不意を驚き[illegible]小勢の兵を[illegible]
[illegible]の門物別るるその数十人[illegible]の什器と


山本勘助智計抜小田井城

援兵も遠く出し。其所々に續く狼煙あげ。此時晴信が旗本の大
を消さんと志す者に。勘助大将軍の前に平伏し。君は本陣の衆を率ゐ給ひ。
城追落の小道路にて之を防ぎ給へ。是偏に君の軍令正しき御謀計
己なるによりわが手の小勢なれば勝利を失ふ事なし。依て敵勢を破り
敗軍の後に從ひ附入にせんと志す者あるべし。晴信寅の刻に出で給ひ衆あれ戦ひ給ふべく
手中に與し。味方實に勞あれども附入にせんと攻るならば。敵勢の陣をも破
られしと志を一致にし。死をの狂ひに戦ふならば。都て味方の勝利なるべし。
其後漸く鋭氣も緩も出でて手弱に成るべき此小勢一日もささへがたし。
さればこそ。敵も数多く味方の死傷あらんも是を思ひ攻口を緩めて引
退せり。勘助が曰く城攻の最中其勢を先に遣りて敵夜討を謀かく
働き玉はば彼定めて勞れ果て其勞れを事とせずして早く攻落さるべ

きなり。若一夜日を經る間には防禦を構へ其所の教ひにも援兵の数
城きされ幸ひ此ままに一時を争て一旦攻むべし。手負ふ者も頓に甞之
本陣の我に晴信も承引ましく。合図の武田孫六信廉、工藤源左衛門尉
昌豊原隼人佐昌勝を添て勘助が引連たる勢を其先として
其勢二千余騎。小田井の城に押寄れば城中の兵ども強く今城下まで
町を焼し煙の中より引入り俄に物具を飾り迎へんとする所に早城
外に押太鼓の声とともに武田の軍勢うち入れ手に城を攻むる錠をも散
あけぼのの空を焼きとて失せるに城兵ども一表の合戦をもなく
當城の果て打ちはなさるゝ武田勢の攻太鼓を聞て大きに驚きしかば
せんかたなく狼狽て小田井が城中を逃出んとす。味方は法をもって
打たけば敵軍とても討たるる兵あり。城中堅固に籠りたると見える

なれば程なく引とる支度取しけしも息つく事なくそのあとを
立所に斬て棄んとせば城中を馳廻りて下知しければ諸卒是に力を得て勇を励
し櫓の上より岩石を引落し或は礫を投下し敵の手に充
たるをも石をば投捨し材木を落しかけ防ぎ丸の術計数多ありて能く
堪へける處に武田方城中の西より火の手揚りて常廓の内なる厩籾櫓所々
一同に火炎燃上つて焔しきりに率従ふて早搦手木戸焼崩して是原
来勘助が方寸の智略より出たる所に勘助が陣後詰の物見
来る時波物別なる間五十人を間道より返し味方へ参し己に城
無清信濃国に追討ち城中にかけ入て紀敵の後軍に多勢を味中にへ
し先陣老に悪く計略を授てまた火を放ち焼立よと
胴の火ならず用心なし雑兵の中に立まじり五十人の内が廿三人

火しか城内に籠し又六郎者ご城中の勢を駈出して小勝みてる所
武田勢押寄て火を懸先に又六郎兄弟東西の櫓に上つて寄手の勢
を防戦最中なれば用意の火薬をかけ出し所々に切れ火を投て折
柄嵐烈しく棟に移り火炎東西に燃上つて囲炉裡中の清写を追
給ひそのよしなれども味方の甚なもゆるにもあつて真
備更に周章てたりて兄弟之を見れば小田井又六郎方へ下知し
二の郭の内に引入り其身二の郭門に向ひ全軍勢ある二の郭に
操入つるに勘助馬上に立上つて敗兵追討せよと一同に攻め方を
焼つて味方を追来兄振りて味方を励し一番に城門を打破り
是は未だ城に我蔵土橋堀河ある馬に鞭をくれて城中
広瀬曲渕を引率して山本が導の度に付く城中に攻入二の廓の

小田井兄弟戰亡

門へ迫入んとするに小田井が勢二の城戸よりあつく数くの矢を放ち石を投ると
雖も所小野勘助が勢の中より兼て熟する間者を城兵の勢に擬装せ二の郭
に入て火を掛ける其日は十二月十八日巳刻二の郭より焼出し付たせしかば
小田井兄弟今は是非なしとて羅城に突出し思ひ出の戦し討死せんと
一番に小田井治郎左衛門至よ人を殺し勢くれる近臣又十余人を引連て
に成て突出るを勘助馬上にて是を視て是こそ城将小田井兄弟の内なれ
見逃す討取くと今日の得分なる名を世に知れば我組の者と武田勢れ
勇士治郎左衛門を目がけ近寄て治郎左衛門是を見て多くの人を太刀抜かざし斬
寄る小幡か数く切立られ流石の命掛の武者も比しなかなか武田勢も中々
囲て通しかば小幡虎盛が嫡子又四郎孫次郎と名乗て治郎左衛門が
馬の前に馳来て太刀抜て馬足を切て落したれば主の連将の豪傑なるを

屋是の一物後足を薙まで乃ち其の倒るべき屏風を倒すが如く主もろとも倒
に落たるを押て首取んとせし所に小田井が家老上原市之助因
来主人の難を見るより孫次郎を目がけ飛かかりて組付ば孫次郎も是に
負ずて治郎左衛門が首を持上原と引組て上になり下になり揉合ひ
其の透間を見て突たりきん上原が猛の手摺の間を立て小窓し
上原抜群の豪傑と雖も終に倒まてる処を討て首を捧げ大
音声をよ小田井治郎左衛門が老臣上原市之助をば小幡孫次郎虎俊
年始九歳にて之を討たりと呼はる此時落城の体を見て
味方城外に溢れを立て士卒の軍の為術と見物して目出度かり
春日源五郎も外郭へ乗入二の城戸へ乗込んとする所に城中より
尾の兜に白檀塗の鎧着たる武者来て人々けたりて是上和田源之丞と

今日此城落去の期来ると思ひ定め一軍華々しくせんと思ひける所に三尺
余寸の長刀提げ城外に突出し縦横に薙廻り源五郎が郎等数輩
を討取るといへども近寄る者もなく互に名乗して手鉾を交へ其雑もせず戦ひしが
春日弾正が郎等上総と成て孫次郎と渡り合其首を取らんとせしが
を始として源五郎首二級を得たりしが小田井又六今は世の中も限りなりとや思ひけん
思ひ出の戦せんとて城門を開き妻子此身の上歎けども生捕られ恥を晒
さんよりは我手にかけて三途の川を伴ひ行んとて丸に立返り見て忠臣
の身の上こそ哀なれ斯て小田井が妻子を引連れ落させつ又六太刀
歎息しぬるを其の尊勤や猶も連れ思ひ出の戦せんと死後までと約して
宇恵の士七騎等人前後左右に引連れ二の城戸より突出し例の大半月是迄
の鎧金の馬甲ある馬を構へ武田方にても是を見て小田井ござんなれ

我組留んと名乗の縁先に思ひたり大将軍此御下知ありて御旗本の人々追と
に無数の寄手喰止め小田井又六郎を討んと追懸てせしが
安中の子細あるにや退きて此時の又六は上大声をあげて甲州の
者共聞け我不肖なりといへども一城の主将の不幸にして城郭陥し
入らせ生捕られんも恥を捨て降参せん大将の恥辱義のあるに捨る命は惜く
代の後に名誉を残す者なり不義にして存命せんより雲の露とや消ん
首を渡さんぞ我と組まんと思ひ出に戦ねがふ閻羅王へ伺はんとうんぬん
泉下の土産に敵首数三千捨切らく我黄泉の旅に
広言し刃の幅三寸長サ四尺余の大太刀額の上に一文字に
縦横にかけ切入りて武田方の諸士我討取りせんと今日の名をあげん
いまだ斬らざる真向兜割車切馬の頭を打破

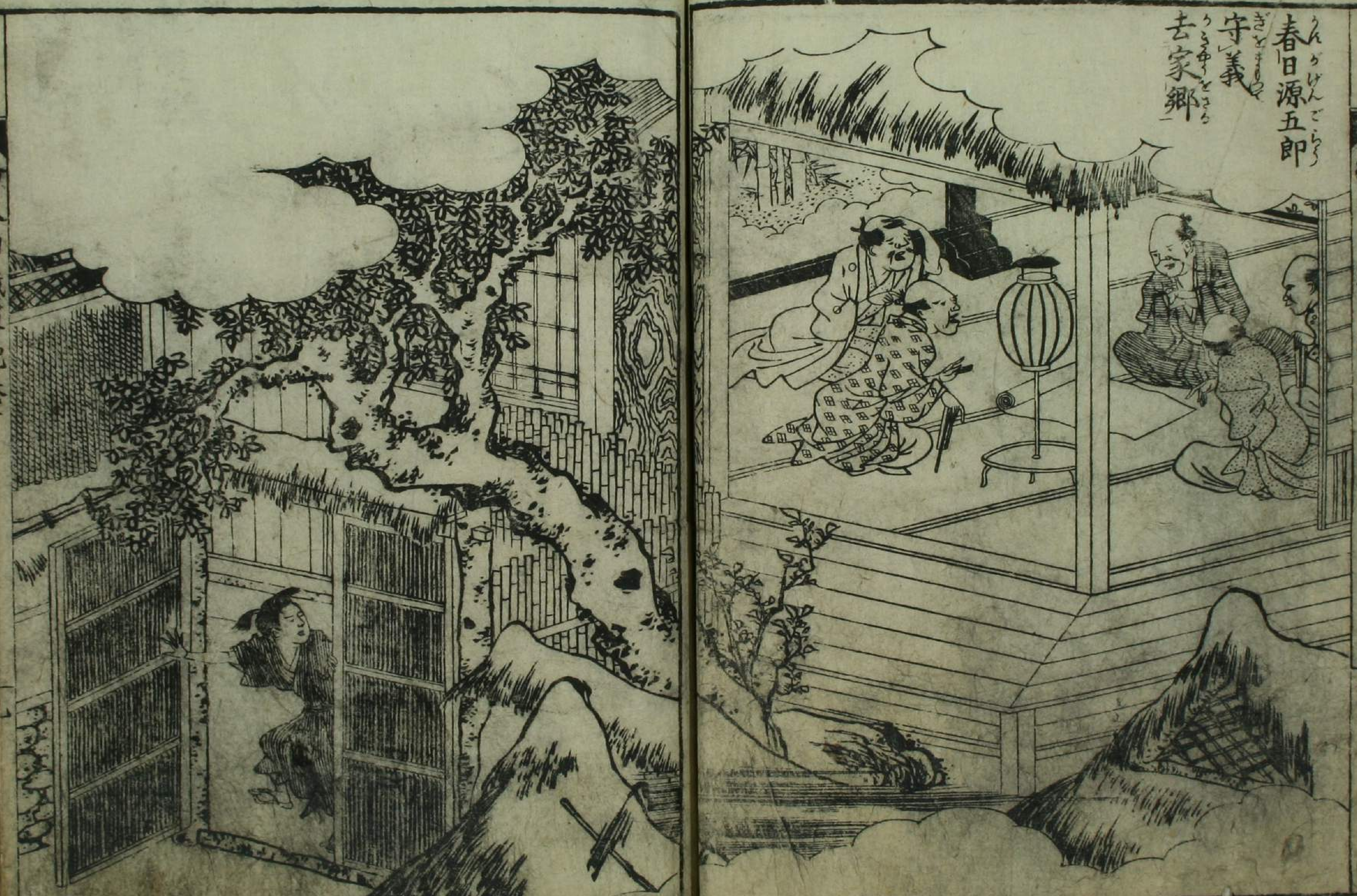
平頸討るゝ迄切合ふ従兵七十餘人残りもなく切死し最期の場を爭ひけるもほど
道と俱に忠を絶し定し近習の者共八方より攻立て武田方大勢ありて
難所へ押し落され己もく引継ぐ討手もありかゝりしもあり陣を駆出し寄手を防ぎ
二の城戸の外に馬踏紅の浪立てあげかゝる所に諸角豊後守曲淵の者ども大勢来て
吐ける声も聞ゆれば城将又六郎が討く出てとくと見て空を覗るがごとく猛き名の由
淵を又六郎と呼はるといへども其体を見るに兼ねて馬の背に乗りたる小田井が家臣中にも一分の
武功の小田井が馬前に進みて射向の袖を揚げ馬を寄て組んとするを小田
井が曲淵を一刀に切落さんと切込むを其手の刀を弓の弦にて受流し
よろしく引組で双方劣らぬ勇力にて互に負じと揉合うち曲淵が組敷て
難なく首を取る所に又六郎も馳来り其時廣瀬小曲淵を
押付て曲淵を助けんとせしに小田井が馬を寄せて其隙に小曲淵と小田井

ゑ上は城下へ逃ゆく難なく廣瀬小田井と組合て首を取べくはしよりて小田井
が家士蛭川弥八郎主の討るゝを見て馳来り甲を並べて既に廣瀬危ふかりしに
馬上より蛭川が兜の鉢を一刀に切割て身を離して側まで行己に両人が廣瀬
今日思ひ合されたり大将討れて残兵今は是迄と悉く逃出たり
もあり討るゝもあり或は降参せし者も多かりし其日の手柄は小田井の城を
攻ち後信玄本陣に入首実検ありて諸将を召出され功ある輩に恩賞感状をぞ
下されける

高坂弾正頼褒賞之事　并　高坂由緒之事

今日の合戦一時に勝を得る事は山本勘助が謀計に依るなれども盛状
とて下され深志春日源五郎は百姓せられ深志に於て諸将の誅伐の時抜群の働き
して敵の首級を取り今度此戦ひ手を勝まで功を顕しその初陣の手柄

331

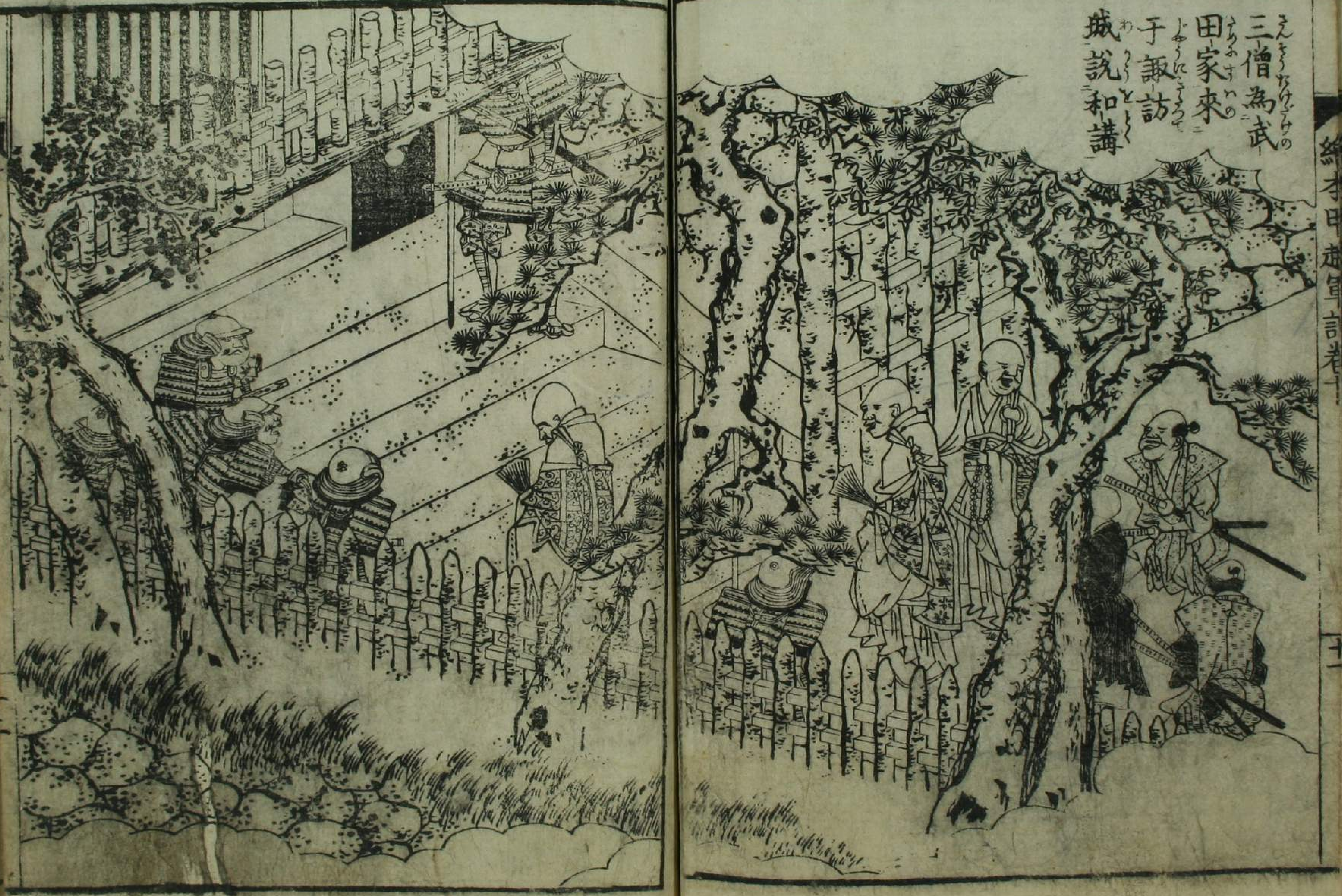


末なりと宣ひ貞宗此言力を下されば深雪部張設て弦正を越られ
ける猪去日強正が来歴張弱るによりて甲斐井沢の百姓春日大隅と云者あり
婿井沢五郎信種に仕しが或ことありて浪士となり後に井沢家没落
せしより二君の主に事へず農家となり田間に隠れ新墾地を開し
徐ろに年月の内に家産を増して富ける独子に大隅男子なく女子
壱人ありし故に一族の内より宗と云を迎て是を養子として婿と
配せしめ家産相続まつる其後大隅妻四十歳にして懐胎なし臨月
に至りて平らかに男子を生る是春日源五郎なり大隅夫妻老て後の男子なり
し殊に掌中の珠のごとく愛楽しける其後母は源五郎三歳にて附病に
罹りて死し其後は父が為に長なり源五郎と名付鍾愛慈悲を年月を
歴しく既に十六歳に及びし時父大隅病に臥て一たび病褥に臥して起ず

あらざりしが源五郎常に初めより世にも稀なる是非度合を忘れ一家餌を絶
極く医療も手を尽せしかども老命窮まりあらざりければ既に死せんとする時
年の宗を集めて枕の辺に招き我没後を汝に配せ家産を譲り後は汝
稼穡の業に怠らざれば家産も増して蓄貨も饒に死ところなりしが
老後の備へも足らず又身に病あり幼子に源五郎出生して一年ざるに算知るべし是後は汝
が子供にして何とぞ此者に家産田畠半を分て与へよ我死後を弔へ
視て悦ばせよとて此うへは我為に仏経読誦の追福をも営んとて
遠ければ宗を儲て縁になりて後しも忘るなよと一族の者
にあり又源五郎も此所にありて十日の弔ひを終しつれば郷の如く母
家産田畠二つに分けて随分中くなしと約しければ大隅死んで
身まかりぬ其後五十日過ても家産田畠とも源五郎に与へざりしかば

一族ども悉く集り宗右衛門を勧めて家産を分ち退しけるに宗右衛門
答て宗兵衛が事は左右の中に寄て源兵衛は追出さんとするに一族皆々悦び
を殺し源兵衛をとどめて此事を官に訴んとするを源兵衛頭を振て
驚きて人々れ芳志悦しくは候へども此義を官に訴給はば父の恥を顕すに似
たり我父も甚宗兵衛此人にして人と争ふ事度々常に我に教へ
のたまはく海嫉群宗兵衛に背く事なかれと宣ひしを我耳底に徹して忘れ
ず彼の父死に臨て我を呼して迷ひ田畠家産を半に分ん
と宣ひし是平日の事となりて人は幸不幸あり我父の老て後に男と
生れたる事は不幸なり是を以て此事訴出る事なかれといへども不肯已に
今合し頭を叩きて告状を認め翌日官に訴て其夜源兵衛を
召しの令状も用ひせず家を出て行方知らずなりにけり

告状を出し訴る力なく落し中にも心あるものは源兵衛が
道を称するもあり又疑ふものも多かりけるに春日源兵衛一年
ばかりは経法の窮追ある縁ある経流の所を寓行来候しぬる父が追
福を願せんと相ひしが忽思惟しけるは一子出家すれば九族天に生ずと
やすやすあまたに出家もさる事なれど天地自然の陰陽ありて天地両儀を離
て東あれば西あり南あれば北あり父あれば子ありて然あれば臣あり
まつまた夫婦ありて善悪邪正皆一対で育てども離れて交る然るに
人は男女と一対として天地の間に人私を生ず二十才以上出家
せるは男女交合の道を煩悩の実として自己の心を発明して仏境に至
んとし陰陽雌雄の道に外れて一切の事に至るを辞する世界の人
悉く是に倣ひし一人も残らず出家を好ば七十年の間に人種悉く



甲越 334

235

清滅して天下は人乱るべき道ハ鬼畜の道に堕入なし殺て然るべき法なり
あれは恐ろしくも忽ち寺を出走で熟と思惟しけるハ人として然れど
天子なり天子ハ其様なり諸侯ハ其家来なり庶人まで庶人の内
に士農工商の四有あり士ハ法一に居まり我術と號士と成て一旦名を
残さんは猶の事然あらし我家の名を起さんが父への孝く武田晴信か居る當時
若くして諸将と呼ひ我甲國の君たり承るべき君に仕へて身を起さん
十六歳の三月甲府に赴き何と我なまいして能く育人を得くや今ぞ清く
人にならんとも住所の所も自己の才覚にあつと甲府を徘徊きをる
不縁もなく中々に経過しろび自ら一通の所書を認め是を懐にして
居たりしが四月の末に晴信釣居雲雀狩に赴く人多く且つ小高を登る
其日夕陽西に傾きて帰陣あるに道の側に平伏して晴信の通りを
のぞく所へ進み出て謹て所書を奉る晴信馬上にて是を眺て観めの所存を見すて
急にして状を拝く出る者あり所載を懐にて宜しく承る其儀に
捧げる書状ぞく開る上にて奉る所持を見るに仕官を望む所書なり
晴信斜ならず悦び恭しく其状を見るに父は豪富の長者にて遺産多く
田畠米捨てて家産を再びつべき者として志ある人物に見えて有り武
者乃ち農民ながらも武芸はもちろん武術の事も弱き事も鍛錬の武士ハ武
芸を知るとも事足らし木刀竹刀の類を以て稽古を為す者平代にて
切爲れ其の世の武は猶て其切柄の稽を学ぶまでの事にして術の虚を
事なり戦場へ出ると見る時は切見に生死の界境あり本が近
習れ石垣く處しや好とて眠近に石垣なる源の事ハ身に移る事多く
やがれ兵卒の前後を忘れて鋭ぐ忠節の外他事なき事を見るべくの

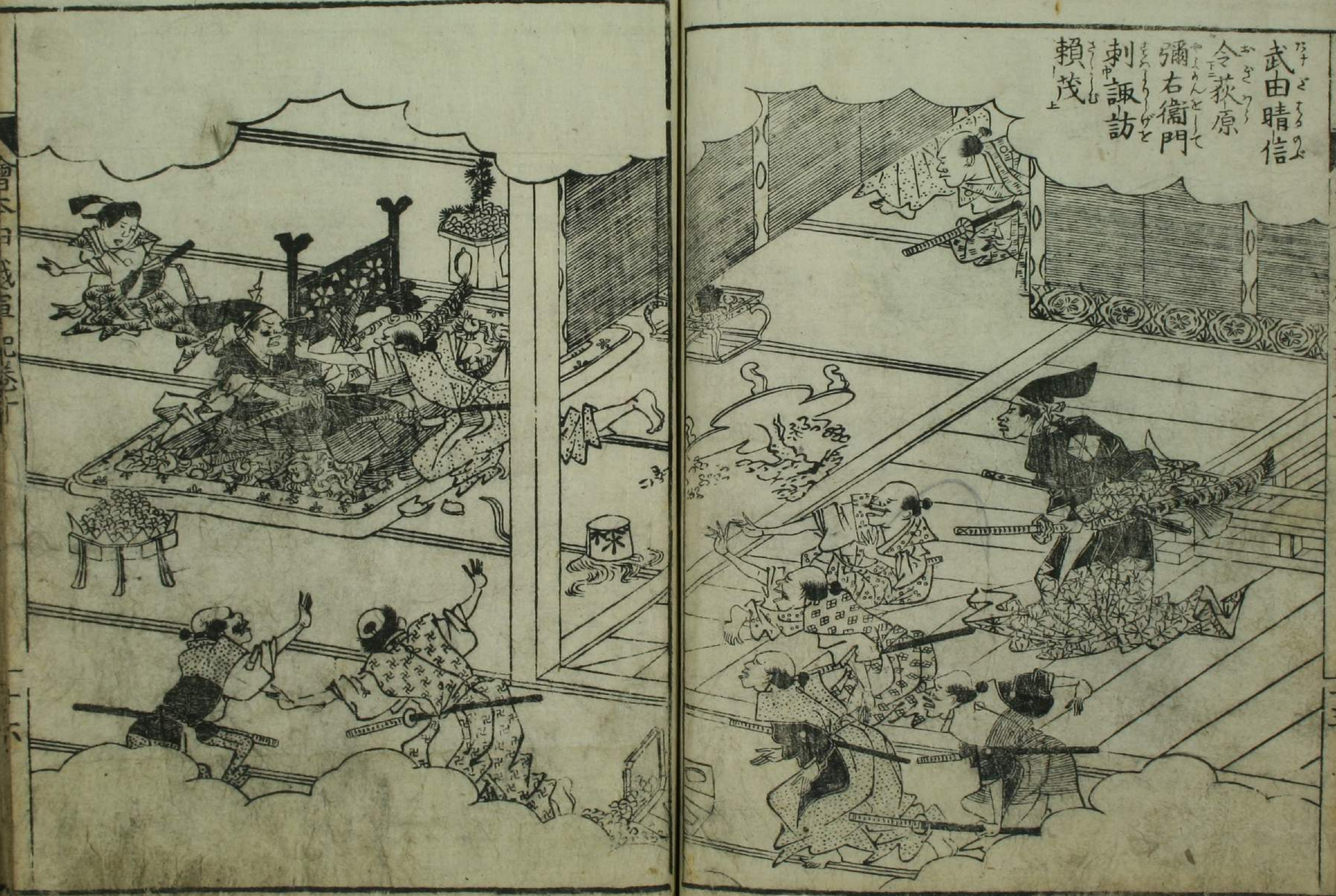
236

國を指くに評判し出でて武田家は人に幸寂きわへ農民を寂なく剿ゑ右ゐし
るは宜なるかな然るに後に八将後の耳に達し海若源氏の孫を側に侍らしめ事ならんや
めくれんと同じ勢なれども後く遂く來る事有なし也寔のさは此時天文十一年晴信
朝臣は廿二歳になるせ又は源氏の孫十六歳の時なり其頃污せる事も母く
平しうべき源氏の孫が同族懸れ狂の支ありなし也寔へは何の時にや有るべき杯
誹謗せる人も有しかれ此度の御さん人の耳目を驚かし然るに嫡に左右中せし者
実に良将の人を見る事此史の及ぶ所にあらんと告状書ぬ人も有ける覺えぬ
東海に當ふ迫りしかバ甲陣に帰かへ此内山の城にハ飫富兵部少輔を代官
せしめ小諸にハ小山田備中守岩尾の城にハ村上勢を押えて伊奈宮籠(?)を
範季(?)よりられ[illegible]しさ此度の軍一両日城も靡ずして小田井又六郎其府
城攫し支ハ此年勲功が[illegible]めれ勲功あり

晴信剿諏訪頼茂事 并 諏訪家断絶之事

月日の往く事後のめぐりて天文十四年に成しかば諸将何れも年始の賀儀
城中に至るに晴信朝臣左右の人々に宣ひけるは予既に信州四家の中を至に
攻め平げ殘る一族も代を執て後一族も氏家此業に敗北の名取ざるの全く海
者の軍忠と扯るがなる中にも諏訪頼茂ハ予が叔母聟父信虎朝臣の時
より至て不和の間柄となりしかども予代に成りても猶剣戟を揮ひ中をを
みまかるば人ずに於方へ従ひるば木曽村上小笠原と一方ぞ攻亡し信玄一家
を平均せんと思ふ也に小縁く将軍頼茂の方へ使者を遣はして和睦せば帝と
宮に合ふかなる此幸勤助進を出して此儀甚道理に相叶ひ隣国の取合に年月を
送るよりは間に入て帝都へ旗を入るかりの有されば後悔しるとも及ぶべ速に和を
義の思ひ専要に存ずとて小国まで足に此度しられば専林寺もん惟高

武田家士撃二諏訪頼茂之親兵一


武田晴信令荻原彌右衛門刺諏訪頼茂

法成寺の第玄棠昌院太岳和尚を召迎へ和議の事を仲介せられんとせし事を
執持る也家代役せ三條一族なりも及ばれ義議。相ちに信玄諏訪へ使者立てる
然も諏訪伊勢守頼茂は信玄諏訪二郎の主として武田家人へ趣き旗諾
人へ越へる人なり然るに信虎の妹婿なりしかども信虎不仁にして一族城謀
代し甲州一国の地を押領せるを見て斯る悪逆の人と一家に連るも人の
倫の道にあらずと絶に義絶し。其後数度合戦に及びしかども頼茂の後を
憚ず二郎の主たるに諱を撫ひ信虎に対して一箇の戦するがごとく村上小笠
原の人々と幸ひに信虎と地を争ふ折なれば共に合縦して屡合戦をぞ
挑まれける。然るに信虎今川家に退隠の後晴信継業年なる此間四家の好を
合せて戦ふも武田家を亡さんと一騎の間なるんと天文七年より其の合
戦まで八年の星霜へて山本の戦今年に至るまで十余年の間

年毎に武田と戦ふといへども一度も勝利の軍なく已に頼重が後の如くならん事の
恐と折られ今は婚姻も重なるといへども斯ては婚姻も武田と和するに若ずと
高遠家老保科を遣して窺ひ給へし縦使もあらば和議とも調へてんとの事に迎募
は後悔の色頗生ドける折から二月上旬甲州より惟高第玄太益の猶家の僧
和睦の為に来り晴信の色頗深く和談を執持より渡口に私を得ける程く
一議もなさず和談に我も及び晴信も出る然も頼茂より使者を迎へて
以後水魚の中なるべき由神文を送らるとはさらに晴信も予め宿意ドし
同く誓紙を送られけり。二月廿三日に武田方の助信繁が晴信の名代として
諏訪に赴き頼茂及び叔母君に面談し結び更に不孫が其の情を慰し先より
先二の縁談となし成るわれば此年廿二に至るべく小笠原村上の為なるに
時の頼茂三家と約を変じ武田家と盟約を結ぶべし武つの外に

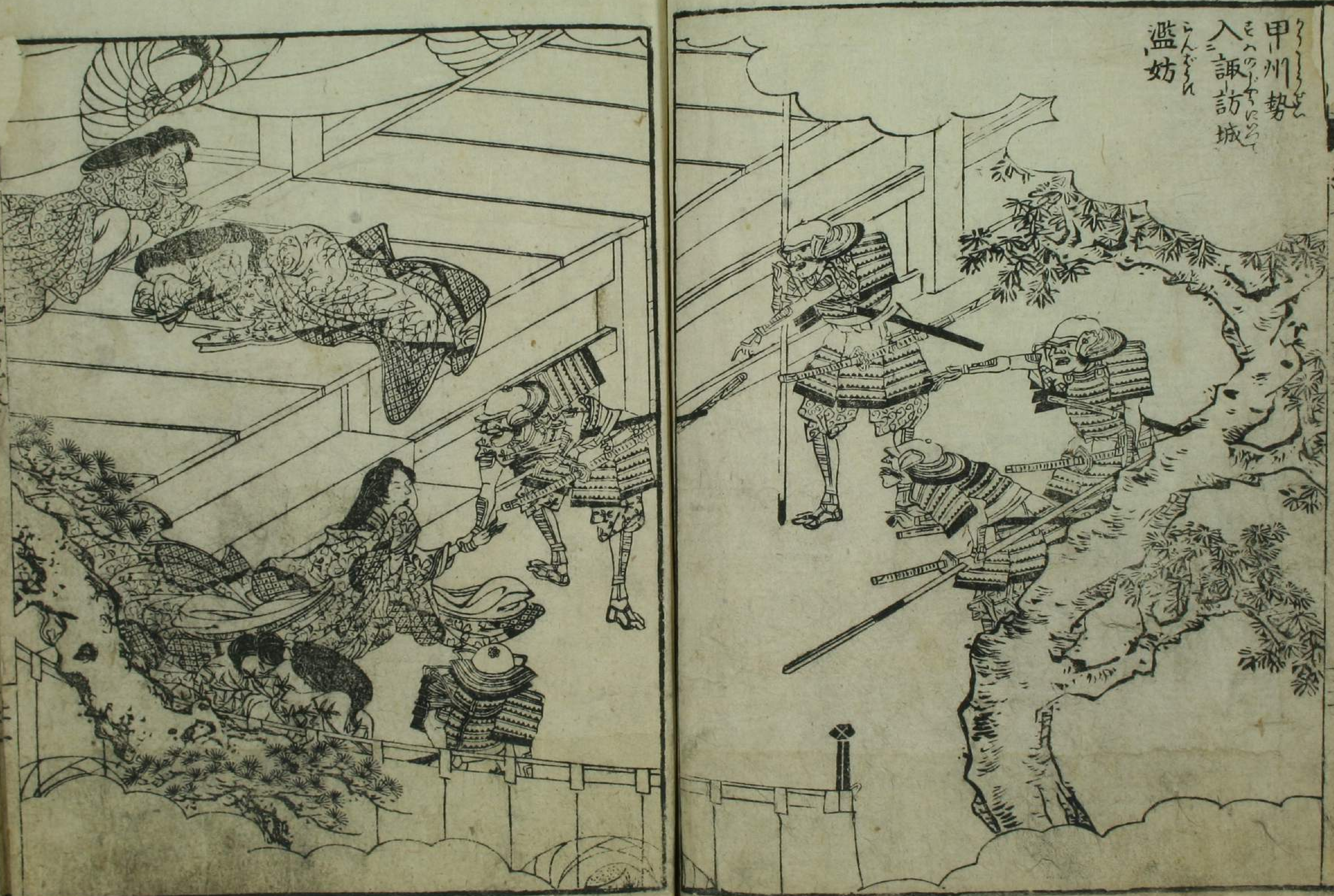
長坂左衛門の尉
闇殺諏訪頼高

たゞ其義のみにて三家一同に押よせ頼茂を討もし裏切あるべくもなく見遁して
せんや既に諸方に合せ近く押寄すべしと寄すれバ頼茂是を知りたる事なから。
是三家の勢押よせるば今ハ武田北畠壱党の族揃へ寄る事へ如ド定め四月
二日に甲府の城に至る将来の旨を囲せんと諏訪祝部頼高を同道して甲
彼に入来せられる。時に佐治荘鶴御出く待し入様よ叔姪の事よく言殺
ある頼茂も甚模様の事を知り既に方に付く所も是なく是れありとて
二日まで逗留せられ四月五日に至り大難を素を至道。申楽弘興行せられ山海
の珍膳を集め盃盤狼藉として饗応君臣とも笑を合しけれバ頼茂も殊
余りて興声林本をなし大義が秘術を盡して座を見て何心なく在りし
所に時宜を起なひ中間頭荻原孫左衛門よりその手をもと海
くゆして頼茂の前に進み遠るとなく頼茂を殺害すべし荻原孫左衛門

畏て座を立次の間に立去り身装し。短刀を懐の内に隠し頼茂の向に近く
居る所に盃盤菓子など取捌給仕の者共ぞよく隠して頼茂の側に叔父
短刀を抜手も早く左の脇壺に突込で頼茂既に要の所刺通しながら。
七首を抜打ちに切付る故孫左衛門其七首を奪ひ返脇を照し一刀に切
伏ける元来武勇の大将と云ども思ひ寄らぬ所を刺さる事なれバ何かは
身をかはすべき甚其身に絶入る上国在の郎等大方なりしバ頼茂に
従ひ申楽見物して居たりし諏訪祝部頼高をはじめ頼茂の扈従等。
十余人各七首を抜て孫左衛門を討んとする所孫左衛門も頼茂を助
けるが七首にて面も職して武田家の諸士も思ひがけぬ事に驚き
此を何事ぞと思へども手技弾ければ場所すらなき。
頼茂の近習武田を討けるる。元来立不意に起りて武田家臣乃

人々も数多創傷を被りぬ此方ハ城中の勇士駈出して向ひ戦ひの精兵を引率し撃破りて諏訪郡頼高一人にて一方を切抜ておちゆきけるを被らば城中を遁れ出頼茂の供の人数を掠られ其人数三百人あまり引連本国さして帰る時に朔日合弟左馬助信繁をも迎ひ海尻にて諏訪へ押寄来る頼茂が本城を攻落さんとして板垣駿河守信形日向大和守昌時を相副て其勢三千七百余騎を以て諏訪へ差向けたり。信繁板垣を先陣とし日向大和守を後軍とし四月十九日甲府を起て信州諏訪に赴きける。諏訪親類の本城に逃げ帰り女性なれば女子にも此事をさとらせ二方に分れて大将と定め子供に頼茂が男子なく息女は僅に十六歳なるが此事を寄せしに手勢と為し親子手に手を取て唯後のわかれの事ぞあはれなりける武田勢続きて寄来る由聞えければ敵城中に入りて戦の用意しけるも思ひのほかに途中に出て戦んと城兵三千人を引率し普文寺村より所々に陣取けり。左馬助信繁ハ板垣を先陣として細萱を打過て普文寺に押寄る両方当る声を揚て矢石を飛して戦ひ武田勢ハ寄手に押立板垣が前隊是を斬切る射るとも事ともせず経兵多く攻付て諏訪が勢も今日を限りと鉄砲を放ち更に退かず死に物狂ひに戦ひて双方死亡数を知れず。何時果るべき合戦とも見えず。されど諏訪が武田勢と入乱れて切結ひ信繁は相図と討取て旗本を先登の侍組として死せんものと思ひ三間柄の鎗おつとり武田勢の中へ衝て入り面に向ふ者を当るに任せて薙ぎをまくり雑兵せば頼高が働きに気を励まし一死を究め諏訪の勢大に乱を殺し鉄砲のことく忽武田勢を五六丁追返す頼高其身も汗血に染りながら一息欲して戦んと味方の残軍勢に號令と遥か先に見えたる丘の上に登るを

甲 248



衆上流して汗を拭ひ扇ぎて居たりける。爰に武田の士に長坂左衛尉と
いふものあり。一条海尻の合戦の時、指南の働きあり。中にも勇気を義より武道に
浪人して居けるが、何卒帰参したき事に思ひ発りて、されば野武士どもの
軍兵語らひして居る中に立交つて居たりしが、頼高が丘の上に馬を立て扇
使つて居る様見て、天の与へぞんなれ、此のものを討ちとり帰参の人事にせんと
鎗を取つて頼高が後の方松の蔭より、道よりを伝ひ攀ぢ近くと寄りけるが
ども頼高何くとは知らねど思を体先にて落る所を、近付て詰寄りて打ちけるが
七堆の鎧の筆も徹ほと突きければ、鬼神とも勝るべき勇士とても若煖め
る所甲を湯がけれど縦く鎖下まで洞貫さるるに、膝つぱ対
にとられ中間来人一散に切てかかる所、長坂も三人の中間を突かけ、共に人の
中間も山下坂をして迎ひ、其間に頼高が首を取られ、弁に机りて

後の山へ下りけるに、此時頼高が中間頼高の首を取らんと待ちうけ立て…
居りたるが、軍大に勝利して立て我一番と、…を板垣信形軍兵追ひ
坂を大勢…押て前を見て方に兵を散らし、…落る所に甲州勢
今日の戦ひに首数三百余級を切りて、此時長坂信形が弟は頼高が首を
城中へ入り悦び、板垣信形が此功にて帰参を遂げける。信繁、板垣を対
此勢に乗じて諏訪を攻取り、しや…諏訪に籠る内に…
にて終に落て城内にある女性が残らず、甲府に送りて…
御旗下板垣信形を諏訪の郡代にされ、今にいたる信繁は
長坂をつまて甲府へ帰陣しける。難波に晴信頼茂の息女を…
あるに容貌勝れ常に越えければ、晴信是を妻として…
子頼を設けて後に勝頼、晴信古今獨歩の英雄とも…

卒八一代の不義乃軍なり然兵ハ詭道にして真義を守り附とす所
も行ふ事雖しぬ頼成を叔母聟なり其性無道にして和議
を結ぶ先約なるを以て甲府に来りし於和睦の私言未だ其血も乾ざる
に信を背き讒を以て討事ハ匹夫といへども爲ざる處なり況や天下に雄
なる武家棟梁にして不意に寇を起し刺客を用ひ奴を豪傑の路に陥世
雖も紀弾せざるものあらんやかゝる小人傑にまかせ誅殺ありしにて先史に載
ふとも下愚と雖も悲まん然る背徳かな

繪本甲越軍記巻之十終

東京 本 貸本所 牛込細工町 池田屋清吉

飜譯書
倭軍書
唐軍書
隨筆物
國々名所
近世戰爭書類

繪本 曲亭馬琴之作 其外諸先生作

書キ本 軍書 敵討 諸家騷動 御捌物

滑稽物

右之外數品沢山寫本沢山御覽之程奉願候也

書物貸本所
東京牛込細工町
誠光堂 池田屋清吉